



民主主義への道 2

理事長 千葉忠夫

・犬も歩けばキャンプ場に当たる

犬も歩けば棒に当たる。とにかく歩こう。しかし犬死にだけはしないぞと覚悟を決めて、滞在期限 3 日のユースホステルを後にした。右、左と現れてくるレストランの看板には見向きもしなかった。私の足は市の郊外へと向かっていった。

コペンハーゲン中央駅から電車で 3 駅目で下車、そこから西へ 17 キロくらい歩いたところで町並みが切れ、緑が広がってきた。そうだ、自分は農家を探しているんだと気付いた。農家へ行けば食べ物は絶対ある。寝るところだって最悪の場合は畜舎か納屋があるはずだと考えながら旧国道を歩き続けていた私の目に、ふっと飛び込んできた光景は、私が日本で見たことのないものであった。

キャンプ場である。もちろん、日本にもキャンプ場があるのは知っていたが、その違いが大きい。入り口には軍隊の基地のようなゲートがあり、遮断機で閉鎖されていた。金網から中をのぞくと一人の男が動き回っていた。農家を見つける前にここにキャンプしようととっさに思い付いて中の男に声をかけた。私が日本から背負ってきたリュックサックの中には小さな野宿用のテントが入っていたから、ここにおいてもらえば、まず住むところが確保できると思ったのだ。

金網ごしに、

「HALLO! もしもし、キャンプさせて欲しいんだが？」と私は叫んだ。

「だめだネ、ここは 5 月 10 日からしか開かないんだ」と素っ気ない。ここで引き下がっては本当に今日から寝るところがない。私は必死になってもう一度叫んだ。

「おじさん、忙しそうだから仕事手伝うよ！」

「手伝うって？」

興味を持ったらしいので、もう一押し。

「Yes, but お金はいらないよ！」

とだめ押し。

「そうか、本当にお金はいらないのか？」

とにかく寝るところを確保したいので、

「いらない、置いてさえくれたら仕事を手伝うよ」

男は私をじろりと見据えて、

「お前、何人 (なにじん) だ？」

「日本人だ」

「よし、来ていいぞ」

この答えを聞いたとき、”ドアは叩けば開かれる”とまさに思ったものだ。

心にちょっと余裕ができた。今度は何とユースホステルまでの帰りを歩かなかった。バスに乗って帰り、テントの入ったリュックを背負って、夕方にはキャンプ場に戻ったのである。

・次はお金を稼がなきゃ

— 「衣食足って礼節を知る」 —

さあ、まずは寝るところが決まった。次は何とかしてお金を稼がなきゃ。この問題がすぐに頭に浮かんで来た。日本から最大限持ち出せたのは 500 ドル。そのお金はこの時点ですでに 400 ドルを切っていたのだ。何とかして食い扶持を稼がなきゃいけないと、ひたすら思った。社会福祉どころか自分の生活を保障するのに精一杯なのだ。

今になって思い当たることなのだが、自分の生活に必死の時は他人の生活なんて考えるゆとりがない。生きていくことで精一杯なのだ。経済大国になった日本は戦後生き延びるために頑張ってきた。私にしても当時、自分のことで精一杯。他人のために学校を作ってなんていうことは、この時、ひとかけらも思っていなかった。

日本は戦後必死になって国民が生きるために働き、その努力が実って豊かになった。しかし、その必死になっている時点で、私達は何かを忘れて来てしまったのである。福祉に目を向ける余裕が無かったのである。

「衣食足って礼節を知る」

物理的に豊かになったら思いやりも豊かになる余裕があって然るべきだ。今、私達はひもじい思いをしなくて済む時代に生きている。だったら今こそ自分の生活はもちろんのこと、母子、児童、障害者の生活、老人の生活を考えなければいけないのだ。

・「お前は何しにデンマークに来たんだ？」

キャンプ場での最初の一週間。私はキャンプ場開場のための準備作業に明け暮れた。住むところが出来たので、主 (親父) の命令通り、何でもやった。花壇を作るため土を掘っていたら、でかいミミズがいたのにいたく感心したことを今でも覚えている。馬鹿な話であるがデンマークにもミミズがいるんだということに感心したのである。

シーズンになってキャンプが開場すると大きなキャンピングカーを牽引した車が続々と入って来て、私の小さなテントは瞬く間に彼らの谷間に隠れてしまった。

彼らはただ余暇を過ごす者ばかりではなく、コペンハーゲンへ通勤するため職場に近いキャンプ場に住む者もいた。当然トイレ、シャワールームの清掃も私の日課の一つだったが、そこでもう一つ知ったのは西洋人は起きてからシャワーを浴びる人が多いことだった。私達日本人は寝る前にお風呂に入る習慣がある。要するに身体を浄めるのは事の前か事の後かの違いかなあとまた感心したのであった。

ある朝のこと。「お前生きているか？」と誰かがテントの外で寝ている私に問いかけた。聞き覚えのない声の主には私は問い返した。

「生きているけど、何でそんなことを聞くんだ？ 一体お前は誰だ」

「おれは親父の息子で軍隊に入っているんだが休暇で帰って来たんだ。今朝は気温が氷点下になったので、親父がちんこいテントに寝ているお前がどうしているか見てこいと言ったんだ。生きているんなら朝飯を食いに来いと親父が言ってるよ」

何と5月の中旬でも零下になるとは。さすがに北欧だ。私は小さいテントの中で寝袋を持っていなかったのでジャンパーを着ただけで寝ていたのだ。朝食に呼ばれて食べていると、親父が私に聞いた。

「お前は一体何しにデンマークに来たんだ？」

社会福祉を勉強に来たとはなぜか答えられなかった。そんなことよりも食い物を確保しなければならなかった。

「貴国の有名な農業を学びたいと思って来た」

農家だったら食い物と住むところがあるとにらんだからだ。

「何だ。農業か。俺の旧友が農家のアドバイザーをしているから、彼に農家を探してもらおうか？」

何と親父は王立農科大学を卒業していたのだった。

その1週間後に親父から紹介されたアドバイザーに連れられてコペンハーゲン郊外の農家を見にいった。私は、最初に訪ねた農家でもうここでいいと決めてしまった。アドバイザーはもっと他の農家を見てから決めろと勧めてくれたのが、私にしてみれば、食い物と寝るところが手取り早く欲しかったのである。この時にしても、金はいらぬ、食い物と寝る部屋さえあればいい、と今から思うと自分を安売りしていたようだ。

とにかく、明日から来ると約束して農家を辞してキャンプ場に戻り、親父のおかげで農家に住み込むことが出来たと礼を言った。その夜はものすごく満足した気分で小さいテントの中での最後の眠りに陥ったのである。

・農家に住み込んだ

翌日、全財産をリュックサックに詰め込んで、

夕刻その農家に赴いた。その農家は農場主、奥さん、長女（7歳）、長男（5歳）、次男（8ヶ月）という家族構成。しかし、誰ひとりとして英語を喋らないのだ。

私が着いた日の夕、コーヒーとケーキをテーブルにして家族全員で大きな好奇心を持って私を待っていてくれた。私にとってはコーヒーどころか、どこに寝て、何時に起きて、どんな仕事をするのかを聞きたくてもじもじ身もだえしたのだった。言葉が通じない歯がゆさは今でも忘れることが出来ない。

当時、英語とデンマーク語の辞書はあったが、日本語とデンマーク語の辞書は無かった。私は自分の聞きたいことを一つ一つ英語の単語からデンマーク語の単語に直し、発音が出来なかったのを紙に書いて農場主のポールに見せた。彼はデンマーク語でペラペラと答える。けれども私は「?????!」。何を言われても皆目（かいもく）わからなかったので身ぶり手ぶりで想像して理解するよりほかは無かった。

「明日の朝何時に仕事開始か？」

一番気になることであったので紙と鉛筆を差し出すと、「6:30」と書いてくれたので納得した。

・赤いチューリップを忘れず

私の部屋は、農場の小作人用の屋根裏にある部屋だった。ベッドと机と椅子だけの部屋だが、机の上に奥さんのマリアが活けてくれたのだろうか、真っ赤なチューリップが一輪あった。今でもあのチューリップの鮮やかさは脳裏に焼き付いている。

6時半から初仕事ということが頭に入り込んでいて目覚ましを6時にかけておいたのだが、5時ごろから目が覚めてしまった。どんな仕事をするんだろう？緊張と不安が胸をついた。しかしやらなきゃ！と定刻に階下に下りていくと、ポールがつなぎを着ていて、私にも「つなぎを着ろ」（多分そう言ったのだと思う）と渡してくれた。

「後について来い」という（以下全て想像によるデンマーク語の理解）。彼に従って入って行った建物はなんと豚小屋であった。豚小屋どころか豚の大舎であった。私は生まれて初めて100頭以上の豚を一度に見て驚いたが、デンマーク生まれの豚どもも初めて見る日本人（分かったかどうか疑問だが）に驚いたのではなかろうか。

「俺のやるのを見ている、その後、お前が俺のやった通りにしろ」

初めて使う日本人使用人への命令であった。ごつごつしたデンマーク語の響きだったが、ポールの温かな顔から発せられると命令口調というより「こうしなさいよ」と優しく言っているように私には聞こえた。

この手記は月刊「権利闘争」（権利問題研究会発行）にて連載されたものです。転載の許可をいただきました関係者の方々に感謝いたします。

住みよい幸せな国づくりのヒントを探して

仙台大学客員研究員 高橋まゆみ
(デンマーク在住)

【第二話 家庭医とのコミュニケーションを図る】

「幸せな国」を考えると、日々の生活の中で「心身共に健康に過ごせること」が最初に浮かびます。子供の頃からいつの時代もお医者さんの存在は大きく、海外に移り住んでもそれは同じことです。自分の健康について気軽に相談できるお医者さんが身近にいるということは安心して生活できることに繋がっています。デンマークでは「家庭医」がその役割を果たしてくれます。

デンマークでは 1973 年に原則無料の医療制度が始まり現在に至っています。家庭医は国の制度として存在し、住民一人一人が自分の家庭医を持つことができます。家庭医は「総合診療医」という特別の医師資格所有が必要で、一人の医師が平均 1,500 人の住民を担当します。体調を崩したときは家庭医に予約を取り診察を受け、深刻な症状の場合は総合病院などでの二次医療、三次医療へ連携する医療体制を取っています。患者のプライマリ・ケアを担う家庭医は、住民の医療と健康に関するゲート・キーパーとして重要な役割を担っています。ただし、歯科治療は 18 歳までは歯の矯正治療も含めて無料で受診できますが、18 歳を過ぎれば 30%は国が負担、70%は自己負担になります。日本の歯科医で長いことお世話になってきた経験からすればかなりの高額を自己負担するという印象です。

住民登録申請後に居住する市から「健康保険カード」が届き、その翌月には、「がん検診の案内」の封書が届きました。早速、予約を取りました。急患の場合は予約なしで診てくれますが、そうでない場合は電話で予約を入れてから予約時間に行くこととなります。当日、受付を済ませ待つこと数分。初めて会う担当家庭医から名前を呼ばれ明るい印象の診察室に案内。家庭医は笑顔で自分の名前を名乗りながら握手をして少しの会話をしました。その後、家庭医と私の一対一で検査の説明と質問のやり取りをし、検査はものの 10 分程度で終わりました。医師のわかりやすい説明ときちんと向き合う姿勢は、患者の家庭医に対する信頼と安心感をもたらします。検査の結果は後日、個人の電子メールに通知されます。主治医からのコメントで確認できて一安心！デンマークの医療は日本のそれに比較してとてもシンプルで、家庭医からの診断結果も電子メールでやり取りできる（必要に応じて直接電話で話すことも可）、処方箋もメールで確認ができ、アポテークと呼ばれる政府認可の薬局に行けば「健康保険カード」を照合してす

ぐに薬を出して説明してくれます。また、家から近いというのも身近な存在として安心できます。日本で言われるような病院で待たされる時間は長く、診察はものの数分ということは感じられません。また、検査に当たって「担当医は男性医師がいか、女性医師がいか」、受付の医療事務員が予約の際に聞いてくれました。

健康に不安があればいつでも相談できる家庭医（主治医）がいると思えることは、人々に安心感をもたらします。家庭医とのコミュニケーションを図るということは、むしろ医者に頼るというのではなく、自分の健康管理にいかに関心を持って生活していくかを考えることに繋がると言えるでしょう。

「心で住みよい」とは答えられません。共通の趣味の仲間やご近所さんとのネットワークをどれだけ保っていけるのかが鍵になるようです。

デンマークの美しい景色を楽しみながら街を散歩していると、デンマーク人は知らない人同士でも笑顔で「God dag! こんにちは！」など挨拶を交わし、温かみや親しみを感じさせてくれます。これだけでも安心だと思えるのは私だけでしょうか？また、デンマークは、これまでもそして現在も外国から多くの移民や難民を受け入れています。多様な文化的背景を持つ社会で、人々はどのように生きることが互いに住みよくなるのかを考えながら行動することが求められていると実感します。生きやすさ、安心感、助け合い、共生、協力、公平、連帯、博愛…以前、習った言葉が頭を巡ります。



(この地区で建てられたシンプルな建物に、三人の「家庭医（総合診療医）」が配属されている。)

平成 28 年度総会の報告

5月21日(土)東京日比谷で開かれた総会は、平成27年度事業報告、同収支報告、同監査報告、平成28年度事業計画、同収支予算を可決しました。(会員は同封資料をご覧ください。)

理事・監事の任期切れに伴う役員改選の結果は次の通りです。(敬称略)

[理事] 千葉忠夫(理事長)、
茂木俊郎(副理事長)、児玉照男(副理事長)、
前田正志(事務局長)、野屋敷いとこ、
田村啓子、茂木ふみ子、川島正仁

[監事] 砂押櫻子、信田力哉

現在の経済状況を考慮し、今年度から新入会員の**入会金は廃止**することも了承されました。

また、総会で顔を合わせなければ他の会員の名前もわからない現状は活動の活性化の支障になるということで、会員外には極秘扱いで会員名簿を作ることも決まりました。名簿に載せて良い事項、知らせたくない事項の調査を行いますので、同封の用紙にご記入のうえ返送してください。

研修塾に関する説明は別項で書きます。

総会終了後、恒例の意見交流(懇親)会が当初予定の20名を超える参加者で開催されました。

(文責・茂木俊郎)

平成 29 年度総会日程について

来年度の総会は5月27日(土)に開催します。会場、開催時刻等の詳細は改めてお知らせしますが、現時点では概ね今年と同様と考えています。予定に入れておいてください。



ポーデンセの民家と菜の花畑に咲くコクリコ

~Weekend Folkehøjskole in kagoshima 第7回研修塾 in 鹿児島のお知らせ

今年の研修塾は鹿児島会の会員のご努力をいただき鹿児島市で開催することになりました。

日程: 9月16日(金)午後3時~18日(土)正午

会場: レインボー桜島

テーマ: 安心して生きられる社会

講師: アンニャ・ロン・クリステンセンさん

(デンマーク、北フュン市議会議員、同市議会社会福祉委員長)

森田洋之さん(医師。鹿児島医療介護塾まちづくり部長他。著書に「破綻からの奇蹟~いま夕張市民から学ぶこと~」)

参加費: (2泊3日) 30,000円・会員27,000円

3日間通い、1泊2日の参加も可能です。

(費用は、お問い合わせください。)

2日目シンポジウムのみ参加 1,500円

学生は1,000円

1日目懇親会のみ参加 5,000円

定員: 研修塾50名

シンポジウムのみ 100名

申込締切: 9月2日

申込・問合せ先 同封チラシをご覧ください。

北欧短期研修に同行して知ったこと

5.28から数日ノーフェンス・ホイスコレの短期研修に同行しました。スウェーデンには保護者が夜間勤務の児童にも対応できる24時間開園している公立の保育園がありました。育児休暇が1年間あるので、0歳児保育はありえないとも知りました。

一方デンマークでは教育効果は大きいが高コストも高い森の幼稚園が、財政悪化のあおりで廃止されるケースが増えていると聞きました。

オーデンセのローカルセンターRorsen Gardに勤務するアンネさんの話では孤立や社会性の喪失を不安に感じる高齢者が、センターの外縁部にある高齢者団地への入居を希望し、「待機老人」がかなりいるそうです。

補助器具の再利用センターではデンマーク人の合理的な考え方に改めて感心させられました。

そんな話も研修塾で交流できたらと思います。(茂木)

編集後記 ★英国の国民投票の結果は衝撃だったが、離脱派の指導者たちが嘘の説明を続け、公約にもシラを切っているという報道はもっと衝撃的だった。★日本も参院選の最中だが同じようなことをしている政党に騙されてはなるまい。★話変わって、ノーフェンス・ホイスコレの日本人短期研修者用宿舎が5月30日に落成、オープンした。★ツインルーム10室はトイレとシャワー付き。他に多目的室、納戸、車いす用シャワールームがある。★今後多くの研修者に利用され日本の生活度向上の役に立ってほしいものだ。(茂木)

発行所

〒292-0801

千葉県木更津市請西4-6-9

Tel: 0438-36-3565

お問合せTel: 090-9827-9262

茂木俊郎

NPO法人ホームページ

<http://www.djsli.com>

メールマガジンの申し込みはホームページからお願いします。

